日本ボリビア協会会報誌　　令和3(2021)年　6月30日発行

カントゥータ
Cantuta

No. 44

ベニ川とマドレ・デ・ディオス川の合流地点の高い岸辺（Ribera Alta）に向かい、日本人が上陸しようとしていた当時を描いた想像画。リベラルタ日本ボリビア文化協会所蔵※

１　日本人が見たリベラルタ　―その６―　……　大島　正裕
２　雨季のベニ（ボリビア・アマゾニア）旅行記　……　佐藤　信壽
３　オリンピックを契機とした日本・ボリビア間の国際衛星放送中継の将来性　……　宮城　信彦
４　新任駐日ボリビア臨時代理大使ご紹介　……　杉浦　篤
５　ボリビア近況報告　……　杉浦　篤

一般社団法人日本ボリビア協会

ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA　https://nipponbolivia.org

１．　日本人が見たリベラルタ
―その６―

財団職員
明治大学島嶼文化研究所客員研究員
大島正裕

Ⅱ．リベラルタ日本人会草莽（そうもう）期の人々

１．上原松四郎

1915年（大正4年）2月15日、リベラルタ日本人会は創設された。前号紹介した下瀬甚吉は、この日本人会を中心にリベラルタの日本人をまとめ上げ、長くその中枢として活躍するが、そもそもこの日本人会の創設にあたって、モデルとなったのはその1年前に創設されたリベラルタ沖縄県人会であった。第1次沖縄移民として1954年（昭和29年）にボリビアへ移住しオキナワ移住地で長く過ごし、後に沖縄に帰国した安仁屋晶『コンドルの舞う国　ボリビア移住記』（2006年）によると、この沖縄県人会のそもそもの創設目的は、沖縄人の人数が増えてくるに際し、他の集団からの自衛手段を確保することであった。県人会の創設に向けて中心的役割を果たしたのは、これも後の日本人会で長く活躍することになる上原松四郎という人物である。

ペルー日系人協会（APJ）と国際協力機構（JICA）横浜海外移住資料館が共同運営している「Pioneros Ver.2.2 ペルー日本人移民データベース（1899 - 1941）」で検索してみると、Uehara Matsushiroは、1881年（明治14年）6月5日、沖縄県国頭（くにがみ）郡国頭村の出身で、1909年7月16日に香港丸で自由移民としてペルーに来訪したことが分かる。その後、いつの頃からかリベラルタに定着した。安仁屋によると上原は日露戦争に従軍し金鵄勲章を授与された元軍人で、「軍曹」と綽名されていた。

しかし、会則では、軍人のもうひとつの特性である会員の規律の方が強調されている。

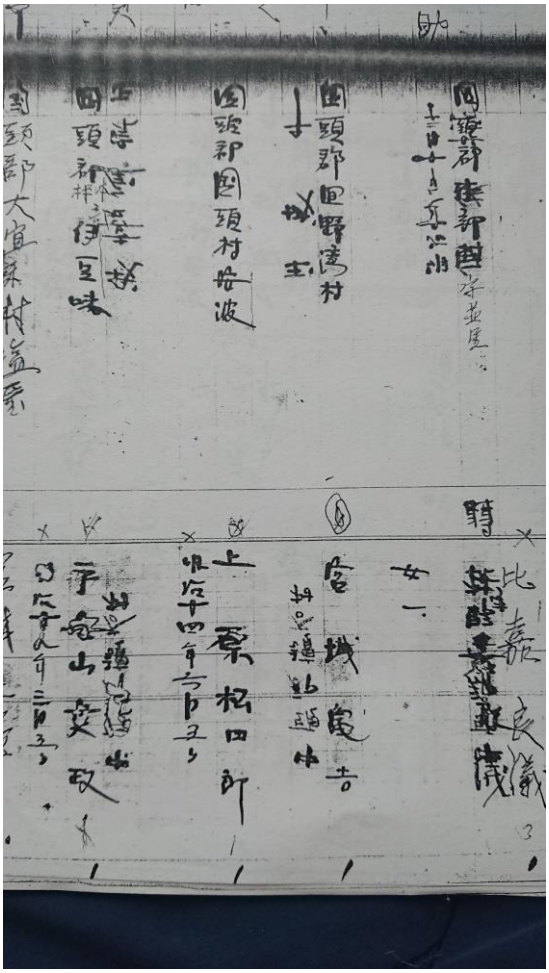

写真1-1 リベラルタ中央日本人会議事録」（写）の会員名簿内に上原の誕生日と出身地が見える（昭和10年代頃の名簿か？）

安仁屋晶が、国会図書館に寄贈した文書の中に沖縄県人会の設立の趣意や会則が見える。資料によって若干の異同があるようだが、一部を抜粋してみよう。

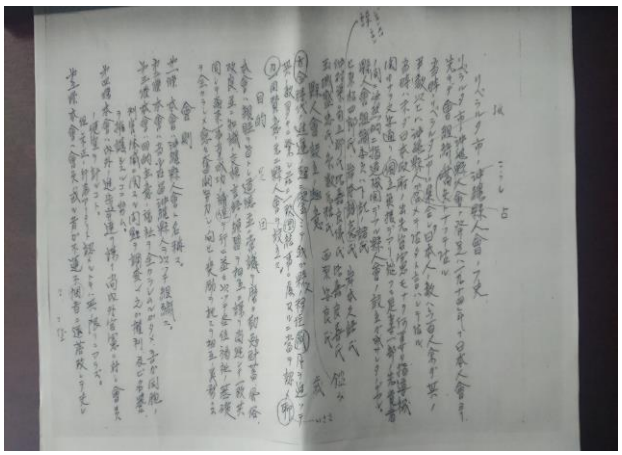

写真１－２　国立国会図書館憲政資料室
移（一）ボリビア３－１
安仁屋晶関係資料　沖縄県人会関係資料

「方今（ほうこん）時代の進運の趨（すう）に鑑みて我が県人の移住歳月を追って其の数多きに繁し茲（ここ）に一致団結事に処するに当を認め聊か（いささか）一同賛意の元に県人会を設立す。」

月日が経ってくるにつれて人数が増加したため一致団結する必要があると述べ、続けて会の目的を次のように述べる。

「本会は親睦を旨とし道徳並びに常識を磨き勤勉財蓄、風俗、改良、並に知識の交換、言語の練習を相互に謀り尚進〔ママ〕して一致共同して爾来（じらい）事業成功の補促を行ひ益々以て各位福祉の基礎を全からしめ愈々〔ますます〕奮闘努力し向上の奨励を施すを相互の義務とす。」（以上、沖縄県人会関係資料（写）より引用）

ここで読み取れるのは、極めて全うな社会生活の規範で、以降のリベラルタ日本人会でも指針となるものである。この沖縄県人会から発展し、最終的には、各県県人会（後に熊本、山口、鹿児島、福島県等が県人会を創設した）を束ねる上位組織として成立したリベラルタ日本人会にとって最初の試練は何だったのだろうか。

1915年2月15日に創設されたリベラルタ日本人会で、上原松四郎は、書記に就任した。初代会長は香川県出身の物部頼、副会長は富山県出身の中野乙吉である。日本人会の組織では、会長 - 副会長 - 書記 - 会計（及び会計補佐）が、執行部を形成し、その下に（年によって異なるが当初は）15名程の評議員が評議員会を結成し、この幹部グループが日本人会の運営を行う仕組みだった。更に日本人会に入会している会員の出席による定期総会が開催されていた。

上原松四郎は、沖縄県人会を創設しただけあって、そもそもオーガナイザーの才能があったものと思われる。日本人会の創設時のスピーチで、上原はナンバー3の立場ながら、理路整然と日本人会の創設の目的を語った。

「此のリベラルタ市へ出れし今や吾等邦人が当市に三百余名に達し各々当市を舞台として事業を持つ者多く、尚各方面に活躍しつつあり。然りと雖も吾等在住同胞は日本政府の保護なく、唯だ当国政府の保護下に置かれて居ることは私が言うまでもなく、皆様も御了承のことであります。従って吾等同胞は身元の保護なき環境に置かれて居り、吾等同胞の間に事件の興発したる場合は身元の保証機関を持たない環境にあり、尚又吾等同胞邦人に何等の相互扶助機関もなく今日に至って居り、　斯く（かく）邦人が多数寄り集結し来る以上、吾等の中枢機関としての日本人協会の設

立が必然的な問題として叫ばれ今日茲に其の日本人会を得るに至りしは時宜に適した此の上なき結構な事はなく、此の日本人会は吾等同胞の寄り処にして邦人相互間の親睦を計り、言語の修得、当国の風俗習慣に同化して当国人との融和を計り、尚吾等邦人間の経済的紛争問題の解決等を処理して邦人間の融和を計る機関として、尚又在留日本人の身元の保証や各自の財産の擁護等、日本人領事館の代理となるものであります。

以上申し述べましたように吾等邦人の心の寄り処として日本人協会は神聖なる公的な機関として皆様と共に会を尊重し、将来永久的な充実した立派な日本人協会に盛り立てて行くように御願い申し上げる次第であります。」[1]（下線は、筆者）

リベラルタは、ボリビア・ゴム集積所として発展し、多数の外国人が集住していたため、その結果として1910年代には7か国程度が領事館（あるいは副領事館）を設けていたようだ[2]。英、仏、西及び独の有力国は、ゴム産業を重視し、且つこの地で働く同国人の保護が目的だったと想像できる。こうした状況下で、外国人内でも多数派を占め、ゴム労働者からリベラルタ市内の小売業や農業に進出していた日本人がその権益を団結して守り、且つ外部からの圧力に対しまとまる必要性を上原はよく認識していたと思われる。

組織を「日本人領事館の代理」にまで強化するためには、本拠地である協会本部の建物を決定し、財政的基盤のための会費徴収の強化が重要な事項で、更に、会員の連帯感を強化するため天長節行事の実現や8月6日のボリビア独立記念日のため会員から集めた寄付金の寄贈等が初期の日本人会の中で主要な議題であった。

上原はそうした状況下で指導力を発揮し、第一次世界大戦後の1919年5月15日に日本人会会長に就任し、更に1924年には元会長としての辣腕振りが評価されたのか、「日本人会長を煩わす如き事件が突発したる時」に備えて作られた初代の「顧問」に就任する等、初期の日本人会の重鎮として活躍した。また、仲間と組合事業を結成し、精米所を運営する等、これまで注目されてこなかったが、功績の多い人物といえる。

２．スペイン風邪をどう乗り切ったか、謎のOsaki医師

1918年は第一次世界大戦の終了と共にもうひとつの災禍によっても記憶されている。「スペイン風邪」と呼ばれるH1N1新型インフルエンザの猛威である。2020年以降、コロナ禍で過ごす我々は、その猛威がいかにひとびとに試練を与えたのかを共感をもって知ることができよう。

このエッセイで何度も登場しているマリア・デル・ピラル・ガマラは、最近「1917-20年におけるリベラルタ市における影響（Repercusiones en la ciudad de Reiberalta (1917-1920)」[3]と題した論考を執筆し、リベラルタにおける第一次世界大戦の影響とパンデミックの状況につき、当時の新聞資料を検討しつつまとめた。その論考の中に日本人医師Osakiへの言及があ

る。マリアは、Osaki医師という人物が1917年の地元エルコメルシオ（El Comercio）紙に登場し、その人物に「東京、ベルリン、金沢の大学卒で救急手術を専門とする」と具体的な経歴が付されていることを私に教えてくれた。肺結核や性病等を専門として、リベラルタで活躍していたものと思うが、当時のリベラルタの特徴の一旦を見せてくれる[4]。

リベラルタ市は、1917年から22年の5年間で中央広場6キロ四方に拡大したが、反面、同地におけるゴム産業のピークは少しずつ衰退してきていた。

こうした中でスペイン風邪の脅威が迫り狂う。

「1918年10月、「インフルエンザはスペインで猛威を振るい、すでにアルゼンチンとブラジルに侵入し」、多くの犠牲者を出したとのニュースが広がった。リオデジャネイロでは「数人の医師」が亡くなり」、「警告を受けて、隣国〔伯；ブラジル〕では、パラ州ベレン（Belem do Para）のボリビア領事館のアドルフォ・ディアス・ロメロ（Adolfo Dias Romero）博士がバカ・ディエス郡の地区に電報を送り、インフルエンザはすでにその都市に到達しているため、ヴィジャベジャ（Villa Bella)の町とリベラルタ市の税関職員は、「乗客と貨物の受け取り」に注意を払う必要がある。」

更に当時のエルコメルシオ紙からの抜粋。

「最初に、発熱やその他の症状を伴う不意打ち。調子は悪くないと感じるかもしれない。しかし、それからすぐに、頭痛、体の痛み、そして倦怠感が現れ、突然めまいを感じて気を失う。更には、乾いたような咳を伴う発熱、喉と鼻に痛みが広がり、二日目、病気が悪化し、眠気がくる。食欲が失われる。 3日目[…]腰痛を伴う厄介な咳が続く。回復は5日目に始まり、ほとんどの場合、患者は回復するのに1～2週間かかる。」

1919年「1月末までに、感染症の流行は異常な数に達した。感染者は千人以上と推定されており、家族全員がこの病気に感染している家庭もある。死者はすでに50人を超えた。 1919年3月、インフルエンザの流行による死者の累積数がまとめられ、犠牲者の数は合計65人（未成年者24人、高齢者41人）に達した。 合計2,500人の住民のうち、90%がこの病気にかかったと推定される。これが都市部で起こったとしたら、同じことが農村部でも起こったに違いない。」

危機は少しずつ去ったようだ。ただ、この危機の中で、日本人会がどのように活動したのかは記録上ではもう一つよく分からない。Osaki医師がその中でどのように活動したのか、それもまた今のところよく分からない。

つづく

[1] リベラルタ日本人会議事録より。
[2] Del Pilar Gamarra Téllez, María, “Repercusiones en la ciudad de Reiberalta (1917-1920)”, https://inmediaciones.org/la-combinacion-perfecta-pandemia-y-crisis-socio-economica-en-la-amazonia-boliviana/
[3] Ibid.
[4] El Comercio, julio de 1917, No.64, p.4

２．雨季のベニ（ボリビア・アマゾニア）旅行記

元ボリビア日系協会連合会事務局長
佐藤信壽

１．３月24日リベラルタ出発

2021年3月24日（水）から4月4日（日）にかけてボリビアのベニ県リベラルタ市よりサンタクルス市へ長距離バス（flota）での往復旅行をしました。そのバス旅行の様子は以下のようなものでした。

3月22日にバス･ターミナルに行きサンタクルスへの直通バスの運行を確認したところ「通常通り運行している」とのことでしたので、フロータ・ユンゲーニャの24日の便を予約しました。経路は、リベラルタ＝グアヤラメリン＝プエルト･シレス＝トリニダ＝サンタクルスで、片道千数百キロの路程です。料金は普通席便でBs.250（≒$US.36）です。

24日朝6:00バス・ターミナルに行くと、リクライニング3列シートのバスが停車していました。「バスの車両が変更になったので予約座席を変更しましたが料金は、そのままで良いです」とのことで「ラッキー！」と思い座席に着くが、06:30出発予定が08:00出発。何年か前に時間が守られていた時期がありましたが、このように遅れる習慣は簡単に変わるものではないようです。

09:20にグアヤメリンに着き、朝食。11:00グアヤメリンを出発。16:00プエルト・シレスでマモレ河をポントン（ponton:艀の渡し舟）で渡り、夕食。マモレ河は、5m程増水していて川幅も30m程広がっていました。

17:00にプエルト・シレスを出発しましたが、30分ほど行ったところで、トラックが悪路の泥濘に嵌って、その横に先行していたバスも浸かっていたために通行ができずに停車しました。脱出作業をしている運転手達によると「道路公団の車両や職員は、勤務時間の16:30に引上げて、明日にならなければ戻って来ない。」とのことで、そこで車中泊をすることになりました。

写真2−1　泥濘で道を塞ぐトラック

２．３月25日、トリニダーで積み荷検査⇒２６日早朝サンタクルス着

翌朝06:00頃空が薄明るくなるころ、対向車によるバスの牽引引揚げが成功し、通行が可能になりました。

サンホアキンで朝食を摂ってトリニダに向かって進む途中のサンホアキンからサンラモンの間には、水溜まりにオオオニバスの花の咲いている所もありました。

バス座席からの写真では花を写すことができませんでしたが、葉は次の写真のようです。

途中でショックアブソーバーに問題が生じ、応急処置をしました。

トリニダに入るところの検問所で、積み荷の検査が行われて、バスに積んであった小荷物のブラジル製ビール 50 ケースが押収されました。バスの運転手は「なぜこのバスの荷物だけ押収するのか、他のバスもみんな運んでいるじゃないか」とクレームを入れているが、検問の担当者は「今はブラジル製品の移送が禁止されているので、私が当番の時は通していない。他の担当者の時のことは知らない」と 30 分ほど揉めていて「預かり証」を渡されていました。運転手は後から来る「ウニフィカド社」のバスの荷物も押収するかどうか確認すると言って 15 分ほど停車していましたが、諦めて出発しました。バスの乗客の口の悪い人は、「『セマナ・サンタ＊』前の焼肉パーティを準備しているからそれでビールが欲しいのだろう。

写真 2−2　サンホアキン近くのオオオニバスの葉

グアヤメリンでの原価は Bs.47.-だが Bs.80.-では売れるぞ。」などと野次っていました。

（＊Semana Santa:聖週間、カソリックの復活祭（2021 年は 4 月 4 日）の前の一週間を指す）

17:00 にトリニダのバス・ターミナルに着き、夕食を採り、19:00 出発。

トリニダ、サンタクルス間は問題も無く、26 日 07:00 サンタクルス着。

3．3 月 31 日帰路へ

帰路は、3 月 31 日（水）。バス・ターミナルで「ウニフィカド・グアヤメリン」社の 19:00 出発の便を予約しました。料金は Bs.230（通常は Bs.250 ですが、予約が少ないので値引きしてくれたようです）

18:00 にバス・ターミナルに行き出発を確認すると、「問題なく出発するから、ここで待っていてくれ」とのことなので、「出発番線で待つから、番線の変更は無いでしょう」と聞くと「案内するまで、事務所前でこのまま待っていてくれ」とのこと。少し様子が変ですが、他の乗客らしい人達もいるので、そのまま待つことにしました。

19:05、事務所の人が「荷物を運ぶから一緒に来てくれ」とのことで、他の乗客の一人と一緒に行くと、タクシーに乗せられました。タクシーで 15 分ほど走り、同社の荷物集配事務所に着き、そこにバスが停車していました。

ベニ県でもコロナウイルスが流行しだしているとのことですが、棺が 3 つ荷物として積まれているのを見ると、なんとなく「このパンデミックで死者も増えているのだな･･･」という感じがします。(棺の中は空のようですが･･･)

20:00 にバスへの乗車が開始されました。21:00 やっと出発。

４．４月１日サンホアキン、往路と同じ場所で車中泊

4 月 1 日（木）07:30 トリニダに着く。運転手によれば「昨夜サンラモン周辺が大雨だったそうで、その確認をするので、全員降車し、10:00 にここに集まってください」とのこと。最近はこういう案内ができるようになっているのかと感心する。朝食を摂り、ターミナル内を見ていると、バスで隣席のブラジル人からコーヒーを誘われて雑談する。彼はサンタクルスに在住して毎年 4 月にブラジルのグアジャミリンに年金の手続きに行くとのことでした。

10:00 に集合場所に行くも、まだバスは来ていない。10:10 ごろにやっとバスが来て、10:30 出発。16:30 サンホアキンで食事。乗客同士で「このまま行ければ、24:00 までにはグアヤメリンに着ける」などと雑談する。サンホアキンのバス・ターミナルにいた人が「3 日間ほど通行止めになっていたが、また、通行が再開されたのかな？」などと話しているのを聞くと、この先のことはどうなることやらと思いました。

17:10 サンホアキンを出発しましたが、17:30 往路に立ち往生した手前で、トラックが渋滞していました。バスを降りて前方を見に行くとトラックの他に先行していた「バカ・ディエス」社のバスが 2 台と「1 de Mayo」社のバスが 1 台停車していて、その先で対向の「バカ・ディエス」社のバスが泥濘に嵌って動けなくなっていました。小型のカミオネタ（軽四輪）やワゴン車などは、道路脇の所をすり抜けて行きます。結局その日は、バスの車中泊になりました。その晩は晴れていたので、「明日は何とかなるのではないか」と期待して夜を過ごしました。

写真 2―3　立ち往生する車列

５．４月２日（祝日）泥濘に嵌って再び車中泊

翌日４月２日（金）は「ビエルネス・サント＊」の祝日。道路管理公社が、この状態を「緊急事態」として対応するかどうか期待半分で、早朝の散歩をしました。（＊Viernes Santo；復活祭直前の聖金曜日）

早朝の虹が橋にならずに垂直に立つのがうっすらと見えました。
10:00 になっても道路管理公社の動きが無く、誰かの「今日は祝日だから作業は無いが、明日は早朝にブルドーザーを持ってきて対処すると言っていた」との情報が流れる。11：00 ごろサンホアキンから食事や飲み物を持って商売する人が来たが、1 時間ほどで売り切れとなりました。

写真 2―4　中央・垂直に立ち上る虹

午後になると、脇を通り抜けるカミオネタやワゴン車のタクシーに便乗させてもらう人が出てきました。
わたしは、このようなことは、1990 年代に何度も経験したので、当時と比べてみるつもりで気楽に状況をみていました。
夕方、先行の「1 de Mayo」のバスが泥濘を脱出し、少し前進したのを見た「ウニフィカド」の運転手が、「このバスが前進できるまでどれだけ時間がかかるかわからないので、先行の『1 de Mayo』のバスに乗り換えてください。向うのバスとは話し合いができているので、追加料金を払う必要はありません」といって、残っていた私を含めた 5 人に移動するよう求めてきました。
「1 de Mayo」のバスにも 6 人ほど残っていたので、十数名の乗客で出発したが、10m ほどのところで、まだ、昨日の対向車の「バカ・ディエス」のバスが道路を塞いでいるので、この日も車中泊となりました。時々窓の外をホタルが飛んでいるのが見えました。

写真 2―5　大型車両の脇を抜ける乗り合いタクシー

24:00 頃にバスの脇を通り抜けようとしたカミオネタが泥濘に嵌ったが、運転手 1 人のため、いろいろ努力していたが抜け出せず、薄明るくなった 6:00 ごろに他の車両の手助けによって脱出しました。
大自然のもとでは人間は無力だ、一人では何もできないということを再認識し、この度のような雨季はとても気軽に旅行はできないことをあらためて感じました。
サンタクルスで、リベラルタの人へのお土産としてもらった「どら焼き」が、この期間の食事として「助かった」と思いました。

６．４月３日　悪路脱出　グアヤラメリンへ

４月３日（土）10:00 ごろ、道路管理公社のブルドーザーが来て、車両を牽引し始めました。おかげで、わたしの乗車したバスも 11:30 に悪路を脱出し、プエルト・シレスの渡し場に 12:00 に着き、ポントン（渡し舟）で対岸に渡り、レストランで昼食を採ることになりましたが、レストランでは通行する車両が無いので準備が無く、「鶏の空揚げ」しかできないとのことでしたが、直ぐに準備をしてもらい、昼食。

13:30 プエルト・シレスを出発。この時間に出発できれば、20:00 までにはリベラルタに着けると思っていると、18:30 ごろにグアヤメリンまで後 30 分ぐらいのところで、ブレーキとショックアブソーバーの調子が悪くなったとのことで応急処置に１時間ほど停車。この１時間の間に追随してくる車も対向車も１台も無いのに驚きました。応急処置を終り 20:00 出発。24:00 ごろにグアヤメリンに到着。グアヤメリン宛の小荷物の荷下ろしに 1 時間ほど停車し、4 月 4 日（日）01:00 グアヤメリンを出発。

７．４月４日　夜明け前リベラルタへ帰還

ここからリベラルタまではアスファルト舗装で、通常であれば１時間ちょっとで着くはずですが、リベラルタに着いたのは、03:20 でした。乗客の何人かは途中で家族に連絡したようで迎えのバイクが来ていましたが、コロナウイルスの対策として土曜日と日曜日は行動制限がされていて、タクシーも無いなかで、わたしの他数人は、迎えの連絡もできずに、どうしようかと思っていると、バイク・タクシーが２台来ました。わたしは、どうしようもなければ、ベンチで明るくなるまで横になって、誰に頼もうかと思っていると、他の乗客を移送した２台のバイク・タクシーが戻って来たので、それで帰宅しました。

わたしは、今まで「一人旅の気楽さ」と言って旅行していましたが、今回のこの旅行では、「大自然の前では、一人では何もできないのだ」、一人旅は、社会的インフラが何らかの形で整備されている上でできるのだ、ということを再認識させられました。

（終わり）

３．オリンピックを契機とする日本･ボリビア間の国際衛星放送中継の将来性

株式会社アルジー
代表取締役
社団法人日本ボリビア協会　理事
宮城　信彦

１．当社の業務内容

私の母方の祖父の秋山玉吉は、南洋経済懇談会常務理事として、現在の一般社団法人・日本ボリビア協会の前身である旧「日本ボリビア協会」の1954年（昭和29年）２

月18日の設立総会で、理事の一人として名を連ねていることが記録されております。このような70年近い前に遡る昔のご縁に導かれて一昨年2018年の8月に当協会へ入会させて頂き、この度2021年5月27日の定時総会で、理事の一人にご推挙を頂きましたことは大変光栄至極に存じます。

またこの度は早速に当協会の会報Cantutaへ寄稿する機会を頂き、私が関係しております会社の業務内容について、少しばかり紹介をさせて頂けることはこの上ない喜びであります。

さて、わが社㈱アルジーは、放送に関わる映像技術全般に渡ってサービスを提供する会社であります。

当社は映像の入り口である撮影から始まり、編集、音処理から、それを電波に乗せて放送として衛星に送るアップリンク、中継車を使って現場から内外の放送局などへ伝送する中継まで、ほぼ全ての領域をカバーしております。

このうち撮影部分と中継部分は日本で行われるスポーツゲーム、F1などのモータースポーツレース、音楽コンサート、舞台演劇、など様々の文化イベントを始め、G7やG20サミット、海外要人来日の際の生中継や取材映像伝送などの政治イベントを含み、最近では、ラグビーワールドカップ2019年の国際映像中継も担当し、今年2021年7月23日と8月24日から始まるオリンピック・パラリンピックの国際映像伝送も担当しております。

写真3−1　三重県にあるアルジーのGlobalテレポートセンターで、　ここを中継拠点に海外に電波を送信しています。

当社の特徴は映像伝送用の大型中継車を数多く保有している点にあります。日本では映像用の中継車を持つ会社は大きく2つに分かれ、放送局系列とそうでないアルジーのような会社に分けられます。（中継車はこの他携帯電話用災害対策用もありますが特殊用途のため割愛します。）

放送局系列が持っている中継車の電波免許は、放送に用途を限定した電波免許が付与されているため、それ以外のサービスには使用できません。他方、アルジーに付与されている免許は用途限定が無いため放送にもその他サービス用の伝送にも使用できるため、オリンピックなどの国際映像中継にも使用可能です。

このため当社では国内の放送局の仕事はむしろ少なく、逆にそれ以外の国内のイベント関連会社のほか、海外の通信社や放送局関係の仕事が多くを占めています。

写真3−2　アルジーの衛星中継車　ラグビーワールドカップでも活躍しました。

オリンピックの仕事に関しては、海外の通信社がオリンピック組織委員会（IOC）から受注した仕事を日本国内の宣伝ＰＲ事業会社などに卸す形で発注していて、アルジーはその中継部分の仕事を引受けています。

今回のオリンピックでは東京ビッグサイトにIBC（国際放送センター）が設置されていて、各会場からIBCに映像が送られてきて纏められ、IBCから世界各国にオフィシャルに国際映像が届けられる仕組みになっています。アルジーでは各会場からIBCに映像を送る仕事の一部を受注しています。

最近では衛星中継よりも光ファイバーを使用した中継が多くなっていますが、オリンピックでは約2週間の期間中に数日しか使わない会場もあるため、全ての会場に光ファイバーが引かれるわけではありません。特にマラソン会場の札幌などではコースが長いため全ての地点に光ファイバーを引くわけにはいかず、いくつかの地点で衛星中継車が必要になってきます。これはラグビーワールドカップの時も同じで、アルジーは当時所有していた衛星中継車4台をフルに駆使して世界中に電波を届けておりました。

アルジーにはオリンピック関係の映像だけでなく、世界からオリンピック参加する各国の放送局が独自に日本で取材した映像を本国に送るという仕事があります。そのような仕事は海外通信社または放送局から当社が直接受注して中継を行います。

日本から海外に映像送るためには会場などから韓国や中国などの日本近隣の国に対しては直接伝送できるのですが、それ以上遠い国に送るにはアルジーが所有する長距離伝送用の中継設備を使用する必要があります。

写真3−3　東日本大震災海外向け報道に使用されたアルジーの中継車です。

特に今年はコロナ禍の下での開催でもあり、取材クルーが日本に入国できないケースやディレクターだけ来日してカメラマンなどのスタッフと中継車をアルジーや日本のコーディネーターに発注するケー

スがあり、そのような仕事も、増えています。今回のオリンピックでは新型コロナ蔓延のため日本が海外からの観戦客を受け入れないため取材の必要性が増して、慌ててアルジーに発注してきたケースも有りました。アルジーでもそれまで4台だった衛星中継車を2台追加して6台体制にしてこのオリンピックを乗り切る予定です。現在では、日本では放送局以外ではアルジーが最大級の衛星中継車保有会社（映像系）となっております。

２．ボリビアの放送事情と衛星放送中継の将来性

次に、日本とボリビアとの間の衛星放送中継の将来性や、ボリビアの放送事情について少しご説明致します。

世界のテレビ方式には大きく分けて2つの方式があり、ヨーロッパ中心の「PAL」（Phase Alternative Line）と呼ばれる方式と、アメリカや日本などが中心の「NTSC」（National Television System Committee）方式に分けられます。

この呼び方はアナログ時代のもので、高画質化したデジタルHDでは1秒間に何枚の画像が伝送できているのかによってPAL圏では「50i」、NTSC圏では「60i」と呼ばれる方式が主に使われています。

ボリビアを含む中南米地域ではNTSC方式でTVが開始され、現在は60iが採用されています。これは日本と同じ方式であり、日本の地デジTVの伝送方式と同じものを採用しています。ボリビアと日本はTV方式について親和性があるため、日本のコンテンツをボリビアに、ボリビアのコンテンツを日本にといった交流が大変やり易いと思われます。

ボリビアと日本は互いに地球の反対側であるため、直接電波を届けるのが難しい超遠距離なのですが、現在では通信衛星などを使って電波を届けることが可能です。

例えばアメリカのインテルサットという会社のIS20号機という衛星は、ヨーロッパ、アメリカ東部、南米地域などをカバーできる衛星でありながら、日本にも電波が届くという地球の半分をカバーする高性能な衛星です。こういった衛星を使えばボリビアから日本、または日本からボリビアに衛星経由で電波を届けることが可能になります。

現在、ボリビアのオキナワやサンファンの移住地などでは、ＮＨＫの国際放送が視聴されていると聞き及びます。これらの両移住地のほか、サンタクルス、ラパス、コチャバンバなどの３大都市の他、日本の3倍という広い国土を持つボリビア各地に居住しておられる約1万4千人の日系人日本人の皆さんと、約1200万人のボリビア人の方々が、オリンピック以後もこれまで以上に日本発の映像中継放送を共に楽しんで頂けるように、当社も微力を尽くしたいと思っております。

ボリビアと日本とが相互に衛星放送中継を通じて映像をやり取りすることが実現し、両国間の友好親善が更に深まることを期待しております。

今後も何とぞよろしくお願いを申し上げます。　以上

4. 新任駐日ボリビア臨時代理大使ご紹介

一般社団法人　日本ボリビア協会
事務局･専務理事
杉浦　篤

6 月 16 日の午後、椿会長とボリビア大使館に赴き、4 月下旬に着任されたナタリア・サラサール（Natalia Salazar）臨時代理大使を表敬訪問しました。

とてもフランクで快活なスポーツウーマンという印象でした。サラサール臨時代理大使の略歴は以下のとおりです。

ナタリア･サラサール･バルデラマ（Natalia Salazar Balderrama）

ボリビアの外交官。コチャバンバ県出身、３８歳。駐日ボリビア多民族国大使館臨時代理大使（参事官）。

ペルー外交官学校卒業。ペルー・サン・マルティン・デ・ポレス大学博士号候補生。ボリビア民間大学（Universidad Privada de Bolivia）開発のためのコミュニケーション担当コミュニケーター。

写真 4−1　ナタリア･サラサール･バルデラマ駐日ボリビア臨時代理大使

写真 4−2　ボリビア大使館にて

2005 年−2007 年、国連薬物犯罪事務所（UNODC）ボリビア事務所勤務及び国連開発計画（UNDP）ボリビア事務所のために論文作成。

2010 年よりボリビア多民族国外務大臣秘書室長。2011 年−2019 年、アンデス共同体事務局（ペルー）事務局長秘書室長

2020 年 11 月−2021 年 3 月、ボリビア多民族国副大統領兼国会議長秘書室長

ボリビアの TV ラジオへの出演、および開発のための企業コミュニケーションのための民間組織に協力。

アカデミック分野では米国で「アメリカインディアン（先住民）の機会のための基金（AIO）」が実施している先住民大使計画の指導教官を務める。スポーツ分野ではラケットボール（下記補注参照）のボリビア代表チームの選手を務める。

（編集者補注）

Raquetbol（ラケットボール）

1979 年にアメリカで始まり、現在は 5 大陸 90 か国で 1400 万人の競技人口を持つスポーツである。オリンピックの競技種目にもなってあり、日本にも競技団体がある

スカッシュに似ており、前後左右 4 面と天井･床 2 面の計 6 面に囲まれた空間を使い(スカッシュは天井を使わない 5 面のみ）、前面の壁に向かって中空のボールを打ち合う、スカッシュと比べて、ラケットのシャフトがより短く、フェイス面積はテニスに近い　という違いがある。ゲームはシングルとダブルスがある。

以上

5. ボリビア近況報告

（２０２１年3月１８日～6月１５日）

一般社団法人　日本ボリビア協会
事務局･専務理事
杉浦　篤

1　新型コロナウィルス関係

ブラジル国境地域のパンド県のコビハ・ベニ県のグアヤラメリン・サンタクルス県のプエルトキハロでは医療体制が崩壊状態となり国境が一時閉鎖された。（3 月 29 日）

ペルー・チリ・アルゼンチン・パラグアイとの国境が 8 時間/日　閉鎖された。（4 月 10 日）

ベニ州のリベラルタ・グアヤラメリン・トリニダからサンタクルスへ重症者の搬送が行われた。(4 月 9 日）

英国型・ブラジル型の変異株が 6 県へ拡大し（4 月 24 日)、若年層に重症者が多発している。(5 月 18 日）

5 月下旬に第 3 波に突入し、感染者が 6 月 10 日には 3839 人/日と過去最高となり、直近 1 週間では平均 2730 人/日となった。

ワクチンはロシア（スプートニック V・500 万本提供・内 170 万本 4 月 11 日発送、内 20 万本 4 月 18 日着)・中国（100 万本 5 月 26 日着）米国（COVAX 経由 520 万本提供・6 月 4 日）とほぼ総人口に等しい数量の調達が計画され、5 月 17 日現在で接種者は全人口の 7％・82 万人となっている。アルセ大統領は 2021 年 10 月の接種完了を目標としている。

ボリビア政府はワクチンの特許無効化を支持している。(5 月 12 日）

重症者治療用の酸素不足が深刻で、チリ･アルゼンチン･ブラジルから輸入し、並行して酸素の内製化を自治体・病院・大学などが試みている

(5 月 14 日、21 日）

ロックダウンが 6 月上旬の週末に、国全体の約半分の地域で実施された。更に 6 月末迄延長の予定である。

(6 月 11 日）

医療関係者が外国人医師の導入などを定めた衛生緊急法に不満で社会闘争を再開した（4 月 19 日)，さらに給料遅配を理

由にストライキに突入した。(6 月 10 日)

6 月 15 日現在感染者は 409 千人(人口比 3.4%) 死者 15.6 千人 (同 0.13%) 致死率 3.8%に達した。

(日本は同日現在感染者 776 千人 (同 0.63%) 死者 14.1 千人 (同 0.01%) 致死率 1.8%)

2 内政・経済

＊調査機関の CELAG (ラテンアメリカ地政学戦略センター) が、アルセ政権発足後 6 か月間の実績につき、4 月 20 日～5 月 11 日に、国民 2000 名への電話調査した結果 (5 月 14 日ラ・ラソン紙報道) によれば、新型コロナによるパンデミック対応の不備不調などが影響し、下記のとおり 3 月上旬比で政権への信頼度は低下し、一方で不信感がかなり上昇した。

大統領への信頼度

(3 月 4 日) (5 月 14 日) (変動幅)

(信頼できる)

55% 52% 3 %低下

(信頼できない)

33% 45% 12%上昇

パンデミック対応

(良い)

52% 38% 14%低下

(悪い)

33% 60% 27 上昇

各組織への印象

(良い)

・医師団体 60%
・カトリック教会 54%
・国軍 53%
・銀行 51%

(悪い)

・国会 53%
・警察 56%
・司法府 69%

国家の抱える主要問題

① 汚職 24%
② 経済・雇用 22%
③ 女性への暴力 12%,
④ 政治紛争 11%
⑤ 貧困 9 %
⑥ 医療危機 9 %
⑦ 機能しない司法府 6 %
⑧ 治安 4 %

＊アルセ大統領への国営の新聞・ラジオ TV の共同インビュー結果

(5 月 8 日実施)

政治関係：

アルセ大統領は、「前アニェス暫定政権下の昨年 11 月の選挙の際に起きた 36 名の死者・負傷者・拷問被害者につき与党MＡＳ党支持者は「悲しみ、痛み、恐怖」を痛感し、真の平和は司法と共にあらねばならない」と述べた。

また、ア大統領は「MAS 政権は、2019 年 10 月に自己宣言という憲法手続違反のクーデターにより国軍幹部から大統領

綬を受けて就任した前アニェス暫定大統領（現在ラパス女子刑務所拘禁中）や前政権関係者の人権を尊重する」と述べた。

ラパス地裁はアニェス氏側からの不当逮捕についての抗弁を棄却し、同氏の資産を凍結した。（4 月 28 日）

同氏の健康状態は最近悪化している（6 月 11 日）

なお、3 月 23 日の検察から前アニェス暫定大統領に対する訴追理由は、①議会未承認での IMF 借款 3.5 億＄、②2019 年 10 月大統領選挙での不正容疑で拘束中の MAS 関係者の表現の自由の侵害、③チリ国境地帯でのボリビア人への人権侵害。である

米ブリンケン国務長官はアニェス氏と閣僚 2 名解放を要求し（3 月 28 日）、

米州機構人権委員会もアルセ政権を非難している。（3 月 31 日）

欧州議会も同様の決議を可決した。（4 月 29 日）

経済関係：

アルセ大統領は、「前アニェス暫定政権は民間企業を中心としたネオリベラル経済モデル採用して公共投資を削減した結果、国内需要が縮小し、2020 年第 1 四半期の経済成長率は 6%近い低下を招いた。

さらに新型コロナによるパンデミックが重なりボリビア経済は 80 年代のハイパーインフレ期より深刻な GDP マイナス 12%まで悪化した。経済が不安定な下で国内為替市場では大規模なドル買が発生し外貨準備が減少したが、現政権への信頼回復により 2 億ドルを回復した」と述べた。

なお 2021 年の経済指標は下記のとおり。

経済成長率＊4.8%、インフレ率 3.1%

財政赤字対ＧＤＰ比 9.74%、原油価格 42＄/バレル

（参考＊世銀予測 4.7%、IMF 予測 5.5%）

新政権の「経済モデル」についてアルセ大統領は、「MESCP 生産コミュニティ・社会経済モデルへの回帰を目指し、内需拡大、輸入代替　歳入の再配分に焦点を置く」と述べた。

主な方策としては、公共投資、高価値資産税（IGP）、給付金支給を通じての貧困格差是正を重視している。

パンデミックによる緊急事態対応

CAF（アンデス開発公社）からの借款 3.5 億ドルのうち地方政府経由で 1.3 億＄が公共投資へ配分された。

短期的施策としては、国営事業で働く民間従業員（主に鉱山労働者）や、協同組合員への給与支払で国内需要を底上げし、同時に生産部門の中小企業へ 0.5%の低利融資を行ってパンデミックからの回復を後押している。

長期戦略では、建設（道路・橋梁）、農業（甘蔗等バイオディーゼル原料・小麦の生産強化へのインセンティブ）、重点工業（リチュウム、バイオディーゼル、鉄鉱、尿素、電力）の各分野での需要創出

と輸出増進による外貨獲得を推進する。

最近の経済関係事項：

財界はCOB（ボリビア労働者中央本部）5%賃上げ要求に反発、

ロシアの援助で原発センターを首都ラパス隣のエルアルトに建設、将来原発建設の可能性も。(3月28日)

輸出入物流の主要港であるチリのイキケで港湾スト発生（4月26日）

ウユニ・コイパサ両塩湖に埋蔵されているリチュウムの開発技術について再入札が行われ、露・中・米等12か国が参加した。(5月16日)

チリ・ブラジル等から携帯電話、豚肉、ビール、農産物、中古車などの密輸が急増している（国内の物資不足、インフレ予想、為替レート固定などが原因）（6月14・15日）

2021年1～4月海外送金4.5億＄と前年比42%増（GDPの10%)。

同期間において亜鉛など鉱産物輸出が前年同期比89%増のＶ字回復。

2021年第1四半期アルゼンチン向天然ガス輸出は19%増。

都市部失業率が 3 月に 8.1％に改善。（2020年11.6%）

チリ・アリカ←（205 ㎞）→ボリビア・ラパス←（411 ㎞）→オルロ間西部アンデス鉄道の運行が16年振り再開された。

財界・貿易業界・中小企業は歓迎したが、これまでこの区間で営業してきた競合相手のトラック業者は売上の減少を懸念して、道路や鉄道基地の封鎖など妨害行動をとり、政府はトラック業者と協議のうえ当面運行の見合わせで合意した。（5月14日）

3　外交・国際関係

3月23日ボリビアの「海の日」にチリ政府が確定済の ICJ（国際司法裁判所）判決を前提にボリビアとの対話に前向きな態度を表明し、これに対してボリビア側もチリとの信頼関係構築を表明して、5月7日にラパスでの包括協議が実現した。両国間の関係や、経済、国境問題など（海岸線を除く）が話合われた、

但し、在チリのボリビア領事館の再開と外交関係の再開は未定である。

ボリビアのメルコスール加盟についてアルゼンチンは後押し、一方ブラジルは慎重な態度をとっている。

アメリカ政府USAID（国際開発庁）長官にボリビア出身のマルセラ・エスコバル氏が任命された。(4月14日)

ボリビアとメキシコ間でビザの相互免除が開始された。(5月4日発表、5月24日から発効)

アルセ大統領がメキシコを訪問しAMLO 大統領と会談することが発表された。(3月24日)

4　社会

新型コロナ蔓延で、アラシータ祭は2か月遅れで開催され（3月24日)、オルロのカルナバル（例年2月初旬・本年は中止)、ラパスのグランポデール（5月9日）も本年は中止された。

ボリビアの総人口が 1200 万人に到達した。(28 歳以下 55%、29〜59 歳生産年齢 34%)(4 月 10 日)

大都市の人口については、ラパス 300 万人・サンタクルス 330 万人であった。(4 月 10 日)

国勢調査 (SENSO) が新型コロナのため、2024 年に延期された結果、次回 2024 年大統領選挙間に合わないことになった。(4 月 17 日)

コチャバンバ県のイチロ川、サンタクルス県のヤパカニ川流域で大雨による水害発生した。(4 月 24 日)

ボリビア日系協会連合会 (FENABOJA) の新会長に宮城和男氏 (71) が就任された。沖縄県読谷村出身で 1979 年にボリビア移住され、オキナワ日本ボリビア協会会長・ボリビア沖縄県人会会長などを歴任されている。任期は 3 年 (5 月 2 日)

以上

※編集者注
表紙写真は２００３年頃に作成された壁画であり、リベラルタ日本ボリビア文化協会の舞台ホリゾンに掲げられている。作者はErland T. とのみ伝えられている。
佐藤信壽氏、大島正裕氏のご協力によって、リベラルタ日本ボリビア文化協会の許可を得て、当カントゥータに掲載する運びになったものである。

[1]編集委員

椿　秀洋　杉浦　篤　細萱　恵子

◎日本ボリビア協会維持会員一覧◎

Copyright© 2002-2021
一般社団法人日本ボリビア協会
ASOCIACIÓN NIPPON-BOLIVIA
All rights Reserved
（本誌の全ての掲載記事、写真、図表などの複製、転載、改変は禁止されています）